

日 英 の 園 芸 文 化 略 史

年 代	日 本	英国（西洋）
16 世紀まで	<ul style="list-style-type: none"> ○大陸から伝わった植物の観賞は、時代とともにわが国独自の様式を生み出していくが、依然として、大陸文化の影響下（16 世紀） ○貴族階級を中心にツバキが観賞の対象に (豊臣秀吉も醍醐の花見やツバキの収集) 	<ul style="list-style-type: none"> ○コロンブスによる新大陸の発見（1492 年）など、大航海時代 ○16 世紀に科学的な精神の発芽（植物の世界では、ボタニカルアートの黎明期で、科学的な視点をもった絵画の出現）
17 世紀	<ul style="list-style-type: none"> ○徳川の三代将軍の花好きが、江戸園芸の基礎を形成 ○1615 年頃、寛永の第 1 次ツバキブーム ○1635 年以降の「参勤交代」制度の導入により、大名の定住化 (大名庭園の必要性) ○1658 年の「明暦大火」は空閑地づくりに拍車 ○1660 年代の第 2 次ツバキブーム ○1660 年代後半のサツキブーム ○1680 年代後半のボタン。ツツジブーム ○1680 年代後半より多数の園芸書が発刊 ○1690 年、ケンペルが来日し、植物収集（ヤブツバキをヨーロッパへ） ○1690 年代前後、種樹象の三代目伊藤伊兵衛が活躍（園芸が庶民へと広がる） 	<ul style="list-style-type: none"> ○世界的な植物探索の時代がスタート（プラントハンターの草創期、イギリスではトラディスカントが活躍） ○1630 年代にオランダのチューリップバブル ○17 世紀後半から 18 世紀初頭は、フランスがヨーロッパの最強国（ルイ 14 世）

年 代	日 本	英国（西洋）
18 世紀	<ul style="list-style-type: none"> ○1710 年代、京都で菊ブーム、1710 年代後半には江戸でもブーム ○1710 年代頃から花見が庶民に次第に浸透（徳川吉宗が観賞用にサクラを植栽） ○1720 年代の楓ブーム ○1700 年代前半に五代目伊藤伊兵衛が活躍 ○1750 年代に「肥後菊」生まれる ○1775 年、リンネの弟子トゥンベリーが来日し、植物収集（ハクチョウゲ及び交雑ユリをヨーロッパへ） ○1780 年代の桜草、松葉蘭ブーム ○1790 年代の第 1 次百両金ブーム 	<ul style="list-style-type: none"> ○リンネ（1707 年生まれ）の登場により、近代植物学の基礎が確立 ○1700 年代後半にイギリスで栽培業者が出現（クリストファー・グレイ、マーク・ケイツビー等） ○1700 年代後半に、イギリスのキュー植物園等が組織的な植物収集を開始（ジョセフ・バンクスがキュー植物園の経営に采配、公式のプラントハンター第 1 号としてフランシス・マッソンを派遣） ○1700 年代後半、園芸業の草分けとして、リー・アンド・ケネディ商会在活躍 ○1787 年「ボタニカルマガジン」創刊
19 世紀	<ul style="list-style-type: none"> ○1804 年、向島に百花園が開園 ○1800 年代の第 1 次変化朝顔、第 2 次百両金、紫金牛、福寿草ブーム ○1812 年、染井で菊人形の見せ物 ○1810 年代後半、江戸菊の隆盛 ○1823 年、シーボルトが来日し、植物収集（アジサイ、ユリ等をヨーロッパへ） ○1830 年代の桜草、花菖蒲、松葉蘭ブーム ○1840 年代の花菖蒲、第 2 次変化朝顔ブーム ○1840 年代の造り菊ブーム ○1860 年代の造り菊ブーム、南天ブーム ○1860 年、ロンドン園芸協会から派遣されたロバート・フォーチュンが来日し、植物収集（アオキの雄木をイギリスに） ○ロバート・フォーチュンがその著書「江戸と北京」で「1 マイル以上にもわたって続くナーセリー」の様子を記述 	<ul style="list-style-type: none"> ○1804 年、英国に王立園芸協会（RHS）の前身のロンドン園芸協会が誕生 ○1808 年、一時代を築いたヴィーチ商会在園芸植物の栽培を開始 ○1818 年、協会がケンジントンに送られてくる植物のための庭園を造営 ○1820～1860 年代、協会は、プラントハンターを海外に派遣 ○1833 年、フラワーショーの前身の展覧会スタート ○1861 年、ロンドン園芸協会が王立（RHS）に名称変更、第 1 回グレートエキシビション開催 ○1862 年、第 2 回グレートエキシビション（初のグレートスプリングショー） ○1865 年、RHS が初のガーデニング試験を実施